

IV 成果

1. 現状の説明

(1) 教育目標に沿った成果が上がっているか。

<1> 大学全体

「独立した作家、専門職業人の育成」と言う目的実現のために、専門知識と総合的視野の獲得を可能とするバランスの取れた教育課程編成、特に専門教育では基礎的知識・技能と応用力を身につけるための段階的なカリキュラムときめ細やかな指導を目標とし、次のとおりこの目標に沿った成果が上がっている。

<2> 美術学部

本学では、プロジェクトをベースにした実践型・参加型の学習形態、PBL (Project Based Learning) 科目を正規のカリキュラムとして 2006 (平成 18) 年度から開講している。

従来の大学教育の在り方に新しい考え方を導入し、学生の持つ能力をさまざまな形で見出し、発展させるための指導を行う、全学科、全学年の学生が横断的に履修できる授業である。

PBL 科目は、学生が主体的に問題解決に取り組む学習を基本とし、各自の専門的なスキル (技術や知識) を総合的に活かす能力を身に付けることを目的としている。また、デザインやアートの領域に捉われない教育で、大学生としての幅広い視野と教養を身に付け、人間形成をはかれる科目となっており、社会的ニーズに応えられる多様な能力を向上させるための、有意義で魅力的な教育プログラムである。

PBL 科目の特色は、異なる専門的なスキルを持った各学科の学生が集まり、授業を通して触発し合うことで、幅広く柔軟な考え方や新たな創造を生み出す学びの場である。また、学外においては、授業に関心を持たれた企業や自治体から依頼されるプロジェクトも多く、さまざまな視点や価値が交錯するなかで、生きた現場からも学ぶことができる。

科目構成は、複数の領域に共通する基礎演習、各学科の専門分野に則した課題の提案、企業や自治体、各種団体との産学官共同研究、更には既存の領域に収まらない実験的なものなど、実践的で多彩な内容となっており、多くの成果が上がっている (資料 4-IV-1、資料 4-IV-2)。

<3> 造形表現学部

造形表現学部は、美術学部と同様に独立した作家、専門職業人の育成を目的としているが、美術・デザイン教育を夜間に行う我が国唯一の学部として、交通至便の地にある夜間学部の特性を活かして、これまで社会人教育、生涯教育の機会を提供することに成果を上げてきた (前述のとおり 2014(平成 26)年度入試より学生募集停止)。

<4> 美術研究科

美術研究科博士前期課程 (修士課程) の特色ある取り組みとして、「Day-see」プログラムがある。プログラム名の「Day-see」(デイジー) は、“day=日々”、“see=見る”という造語で、この取組を通じて現在また未来の私たちの社会を“デザイン”という視点から“見つめていく・見つめ直す”という意味と、デイジーという語感からくる親しみ易さに社会の諸問題を身近に考えるという願いを込めている。

開発途上国の様々な地域を対象にして国際交流を行い、地域の貧困問題や持続可能な社

会の在り方などを考察して、グローバルな視野を養う実践的なデザイン教育プログラムとして成果が上がっている。2013（平成25）年度より美術研究科博士前期課程（修士課程）において、専攻や学年を問わず横断的に実施し、その成果を個人の研究活動に反映させることを目的としている。

プログラムの人的構成は、工芸専攻とデザイン専攻のグラフィックデザイン・プロダクトデザイン・テキスタイルデザイン・環境デザインの各研究領域の学生と各専攻に関わる担当教員でなされている。

参加学生は、先進国と開発途上国の両視点から、経済的貧困支援・持続可能な社会の在り方・先進国におけるものづくりの課題などの諸問題を考察し、また対象国の地域社会における生活・文化・経済などの調査研究を行い、ワークショップなどの実践的活動へと展開する（資料4-IV-3）。

また、「ラオス ODOP（一村一品）プロジェクト」は、JICAの技術協力プロジェクトで、貧しい農家の副業とされている手工芸、地場に密着した小規模な農産加工品、特産物栽培などを支援する活動である。「ODOP」は、「ODOP（One District One Product）＝一村一品」ということを意味している。

2010（平成22）年より関わってきた「ラオス ODOP1 プロジェクト」では、本学のバナナテキスタイルプロジェクトが、ラオス南部の1村を対象にバナナ繊維の活用とその織物製品のデザイン、製作の支援を行ってきた。

Day-see プログラムでは、ODOP1 に引き続き 2012（平成24）年から始まった「ラオス ODOP2 プロジェクト」と協働し、地域はラオス南部5県を対象にして、竹・ラタン・織物など地域住民の生計向上に繋がる産品開発デザインと産品のパッケージデザインの支援活動を行っている（資料4-IV-4）。

(2) 学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。

<1> 大学全体

学位授与については、学年ごとに進級要件を設定し、卒業・修了制作（論文）を課す等厳格な評価を行ってきた。

以前は厳格な評価の基礎となる学修内容については明文化されていなかったが、2007（平成19）年10月に「ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）」を策定したことによって、学修内容の共有化が図られ、学修内容に精粗が生じることがなくなった。

また、各学科等においては、予め卒業制作要項等により成績評価に係る基準を明示して、透明性の担保と厳格な審査に取り組んでいる。

<2> 美術学部

前項「Ⅲ 教員方法」の（3）でも述べたように、本学の成績評価は極めて厳格に行っている。また、学位授与（卒業の認定）においても、教務主任会議で報告、確認依頼を行い、後日、卒業・進級判定会議（2月開催の教授会）で報告、承認を行うという仕組みを設けており、客観性及び厳格性を確保している。具体的なスケジュールについては当該年度の学事日程に基づいて行いが、毎年1月の教務主任会議においてあらかじめ確認がなされ、卒業・進級判定会議までの資料作成等の期間において、成績不良者への対応（追課題・追試・追認等）や成績変更は行わないこととしている（資料4-IV-4）。

＜3＞ 造形表現学部

造形表現学部においても、学位授与（卒業の認定）の手続き及びスケジュールは美術学部と同様に行っており、客観性及び厳格性を十分に確保している。

＜4＞ 美術研究科

美術研究科博士前期課程（修士課程）を修了するためには、共通選択科目（選択必修）から12単位（芸術学専攻は8単位）以上及び各専攻の専門科目（必修）を18単位（芸術学専攻は22単位）、合計30単位以上を修得し、更に修士論文及び修士作品を提出し、審査に合格しなければならない（資料4-IV-5 p.13）。

博士後期課程（博士課程）は、1・2年次には、担当教員による個別指導に加えて、全学生及び担当教員によって論文報告会及び総合演習（全体講評会）が行われる。学位申請年度には、7月に主査・副査合同による事前審査、9月に作品審査を含む予備審査、1月には学外審査員を含む本審査が公開で行われる。このように、学位授与にあたって、総合演習から本審査まで、客観性及び厳格性が確保される方法を採用している（資料4-IV-5 p.37）。

2. 点検・評価

●基準4（4）の充足状況

本学は創立以来、独立した作家、専門職業人の育成を目的とし、美術とデザインの最先端で創作研究を実践し、先進的で質の高い美術教育をめざしてきた。このことにより創立から現在に至るまで、社会的に評価され活躍する多数のアーティストやデザイナーを輩出してきた。これまでの美術教育の蓄積とともに、20数年におよぶ産学官共同研究（企業、行政、地域社会等との連携）に基づく教育をベースに、2006（平成18）年度からPBL科目を開講している。以来このプロジェクトをベースにした実践型・参加型の教育手法は、更に発展・深化しており、学士課程のみならず、博士前期課程（修士課程）の国際的なプロジェクトにも波及して成果が上がっている。

学位授与については、ディプロマ・ポリシーの策定によって学修内容の共有化を図り、成績評価は極めて厳格に行っており、同基準を充足している。

① 効果が上がっている事項

＜1＞ 美術学部

PBL科目は、企業や自治体、各種団体との産学官共同研究から、教員からの自発的提案によるものまで、持続可能なデザインや社会デザイン、デジタル・ファブリケーションやインタラクションデザインなど、実践的で多彩な科目となっている。現場に学ぶ視点を育み、生きた知恵やデザインを学べるだけでなく、専門領域や学年の隔たりを超えた授業参加により、フレッシュで活動的な教育効果がもたらされている。

PBL科目は、社会とつながることで大学教育における人間形成をはかり、社会的ニーズに応える多様な能力を向上するための、有意義で魅力的な教育プログラムである。殊に専門的職業人、独立した作家の育成を目的とする本学では必要なところである。

この必要性から本学は産学官共同研究や特別講義などをカリキュラムに位置付けている。産学官共同研究は、本学がもつ「知」や「技術」を、企業や自治体と連携して研究開発を行う取り組みである。本学はこれを長年にわたり、カリキュラムに組み込んだかたちで展開し、研究と教育の両面で優れた成果を上げてきた。国内外の企業、団体からの依頼が絶

えず、製品化を前提としたものから、新しい市場のヒントを探るもの、地域活性化や福祉事業のためのものまで、美術・デザインと社会の関わりを幅広い視点で探求している（資料 4-IV-6）。特別講義は通常授業の補完として、現役で活躍する企業人や著名な作家、デザイナーなどを特別講師として招き、最先端の美術・デザインを取り巻く動向や、特殊な技術を学ぶ場となっており、学生のモチベーションを更に高めている。

（近年の受託研究実績一覧）

研究名	受託者	受託学科
ソーシャルネットワークを利用したサービスのデザイン	株式会社バイトルヒクマ	情報デザイン学科
領域横断アプローチによるサービスのデザイン手法に関する研究（2）	学校法人慶応義塾	情報デザイン学科
献血者数の減少による慢性的な供給不足の問題を改善する	東京都赤十字血液センター	環境デザイン学科
中央ラインモール計画第一種低層住居専用地域での高架下空間の活用案研究	東日本旅客鉄道株式会社	環境デザイン学科
サービスデザインの方法に関する実践的研究	KDDI 株式会社	情報デザイン学科
地域社会の交通とデザインプロジェクト：次世代デザインの方法と方法論の探索	公立はこだて未来大学	情報デザイン学科
コーヒー及びコーヒーエンハンサーに関する研究	ネスレ日本株式会社	プロダクトデザイン専攻/ 情報デザイン学科
触感の定量化への試みとデザインへの応用	山口市文化振興財団	情報デザイン学科
NEXT 八王子織物プロジェクト～はぎれと紋紙を活用したテキスタイルプロダクトの開発～	八王子織物工業組合	テキスタイルデザイン専攻
金属加工における可能性に関する研究	株式会社茂木製作所	プロダクトデザイン専攻
キッズ・イルミネーション in 直島プロジェクトの研究	直島町	情報デザイン学科
キッズ・イルミネーション TAMA2012 プロジェクトの研究	多摩市文化振興財団	情報デザイン学科
Fissler Japan の新たなるターゲット開拓に関する研究	フィスラージャパン株式会社	環境デザイン学科
広告制作作業のプロセスにおけるストックフォートの活用可能性	株式会社アマナイメージズ	グラフィックデザイン学科
駅施設の工事現場における仮囲い制作に関する研究	株式会社 JR 東日本企画	環境デザイン学科
シニア市場向けヘルスケア製品のデザインに関する研究	住友スリーエム株式会社	プロダクトデザイン専攻
Creative Sensors/Shooting Roots	カンパール	プロダクトデザイン専攻

<2> 美術研究科

前回 2008（平成 20）年度の認証評価では、博士後期課程（博士）は「芸術分野におい

て学位論文、作品の成績評価基準を定めることは困難が予測されるが、基準が定められていないため、学生に明示することが望まれる」との指摘があった。

現在、学位論文については、次の評価項目を挙げ、総合評価（可否）を行っている（資料 4-IV-7）。

1. 論文構成は適切か
2. 分析、考察が明確、かつ適切か
3. 独自の考察や新知見を含むか
4. 論拠とするデータ等は適切か
5. 引用、参考文献、図表等の扱いは適切か

毎年4月初旬に、新生生には論文担当教員による個別面談を実施し、全学年には教務委員によるガイダンスを開催して、評価基準を明示している。

作品については、各審査委員から出された論評について全審査委員で合議し、総合評価（可否）を行っている。芸術分野において、特に作品の評価基準を定めるのは困難であることから、本学では入学時から年2回の全担当教員による作品講評会を通して、学生毎に作品について評価を行い、評価基準との整合性を確認しながら指導を行っている（資料 4-IV-8）。

また、学位審査の4ヶ月前には予備審査を実施し、学生に審査結果及び各審査委員の評価と評価理由を書面で通知し、評価の信頼性を高めるよう改善を行った（資料 4-IV-9）。

② 改善すべき事項

<1> 美術学部

PBL 科目に関して、入学時から志が高く、制作と発表の場を強く求めている本学の学生には、企業や自治体からの共同プロジェクトの依頼が数多くある。それらは、大学生レベルをターゲットとしたものから実社会と同じレベルのプロジェクトまで、多様で幅広いものがある一方で、ボランティアと称した経費節減のための業務委託的な依頼もある。PBL が大学教育を改善し、向上するための取り組みの一環として捉えている本学では、企業、自治体などから依頼された研究やプロジェクトの内容が、真に本学の専門性を活かした活動であるかどうか、学生に対する教育効果が十分にあるかを、議論検討をする仕組みを組織化し、科目開講とその運営にあたっていく必要がある。

3. 将来に向けた発展方策

① 効果が上がっている事項

<1> 美術学部

PBL の各プロジェクトの成果は、PBL 成果発表会の開催や冊子の発行で公開発表される。「PBL 成果発表会」は年に1回開催し、その成果を学生はもちろんのこと、企業、自治体など学外の関係者にも参加していただき、高い評価を得ている。また、より多くの学生の履修を促すしくみを設けており、効果が上がっている。

学外からの評価では、2005（平成17）年度に文部科学省の特色 GP 「特色ある大学教育支援プログラム」と現代 GP 「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の2つの支援プログラムに採択された。最近では次のプロジェクトが賞を受賞しており、今後も成果が期待されている。

1	「人のいのちをつなぐコミュニケーション」がグッドデザイン賞受賞
	2011（平成 23）年度より開講されている日本赤十字社とのプロジェクト「人のいのちをつなぐコミュニケーション」が 2013（平成 25）年のグッドデザイン賞を受賞。 3 年間にわたり行われてきた、献血をはじめとした人道支援活動に対する理解や啓蒙を促進するための幅広い提案が評価されての受賞となった。
2	「社団法人 日本パッケージデザイン協会賞」を受賞
	2010（平成 22）年度 PBL 科目「ネスレの商品開発に伴うパッケージデザイン」において製品化された商品「キットカット パッカーナ」が、日本パッケージングコンテストで「社団法人 日本パッケージデザイン協会賞」を受賞。

＜2＞ 美術研究科

博士前期課程は、前述のとおり前回の認証評価以降、評価の信頼性を高めるための改善に取り組んできた。芸術分野における学位論文、作品の成績評価基準を明確に定めることは困難ではあるが、今後も評価の信頼性をより高めるように新たな方策を大学院教務委員会において検討していく。

② 改善すべき事項

＜1＞ 美術学部

教員並びに各学科等が PBL の開設を希望する際には、PBL の窓口である教務部や学内教員に研究プロジェクトを依頼、提案する。その提案を受けて、学内の関連教員から組織される PBL 委員会が科目開講の検討を行う。その後、開講科目がカリキュラム委員会、教授会で了承されることで始めて、全学的なオープン科目と認められ、履修学生の単位修得が可能となっている。今後も PBL 委員会を主体として、プロジェクトテーマの教育上の妥当性、成果について継続的に精査、検証を行っていく。

4. 根拠資料

- 4-IV-1 PBL 科目一覧（2008～2014 年度）
- 4-IV-2 多摩美術大学ホームページ（PBL(Project Based Learning)科目）
<http://www.tamabi.ac.jp/dept/pbl/index.htm>
- 4-IV-3 大学院修士課程 Day-see プログラム ラオス ODOP プロジェクト
2013 年度活動報告書
- 4-IV-4 2014 年度大学院修了・進級判定スケジュール、美術学部卒業・進級判定スケジュール
- 4-IV-5 美術研究科 履修案内 2014（既出 資料 1-10）
- 4-IV-6 多摩美術大学ホームページ（産学官共同研究）
<http://www.tamabi.ac.jp/research/sangakukan/>
- 4-IV-7 評価票 ①博士論文
- 4-IV-8 評価票 ②博士作品
- 4-IV-9 学位審査結果／学位審査結果報告書
- 4-IV-10 PBL 成果報告書